詠む思い 世界共通

第2回盛岡国際俳句大会

日本語と英語の俳句大会「第2回盛岡国際俳句大会」（同実行委主催）は、新型コロナウイルス感染症の影響で今年は事前投句のみの開催となったが、国内外から計3301句が寄せられ、愛好家らが感性を競い合った。

一般部門とジュニア部門に全国から2665句、英語部門にはアメリカ、カナダ、トルコなど各国から636句の応募があった。

表彰式は盛岡市中ノ橋通のプラザおでってで上位入賞者のみを対象に、このほど開かれた。「盛岡にちなんだ題材」をテーマに、一般部門は大会賞、盛岡市長賞、大賞、特選など12句、ジュニア部門は、大会賞、文京区長賞の2句、英語部門からは大会賞1句、特選5句が選ばれた。

優秀作品は、8日午前11時からIBC岩手放送のラジオ番組「夏井いつきの新聞とRadioで楽しむ盛岡国際俳句大会」で紹介する。今回掲載されない入賞句は大会ホームページで確認できる。

一般部門

大会賞

▽夏井いつき選

なんきんのごろりと座敷童子かな

富山県高岡市・富山の露玉

【評】「座敷童子」が、季語の「なんきん」に匹敵するくらいのイメージを持っており、バランスが良い。座敷童子の気配を感じるような一句。

▽白濱一羊選

早天や賢治の井戸にもらひ水

盛岡市・下河原正泉

【評】「早（かん）天」は日照りの空。「ヒデリノトキハナミダヲナガシ」は賢治の言葉。賢治の井戸から引く賢治清水は、今も人々の喉を潤している。

市長賞

▽高野ムツオ選

ナニャドヤラ津波流れの汝もかだれ

久慈市・柳幸子

【評】「ナニャドラ」は南部盆踊りの囃（はやし）歌の一節。その声に乗って大津波の死者もよみがえり共に踊れと呼び掛ける。「かだれ」は参加の意の南部弁。

大賞

▽太田土男選

遠雷や幸呼来の三万が来る

盛岡市・二藍

【評】遠雷をさん踊りの掛け声と聞き取ったのである。「三万が来る」が力強い。ウイルス禍で踊りは中止、なれど幸は呼べば来る。

大賞

▽夏井いつき選　特選

百日の家居ざくろの実は真っ赤

千葉県千葉市・千葉信子

▽夏井いつき選　特選

チャグチャグの上手な馬に蚊遣焚く

奥州市・青沼利秋

▽高野ムツオ選　特選

遠雷や幸呼来の三万が来る

盛岡市・二藍

▽高野ムツオ選　特選

億年の祭祀とおもふ蟬時雨

北海道旭川市・中村純夫

▽太田土男選　特選

天の川氾濫している早池峯に

遠野市・夏谷胡桃

▽太田土男選　特選

青韋の一本蛇籠貫けり

東京都足立区・若林杜紀子

▽白濱一羊選　特選

日のぬくみあるクローバーの首飾

兵庫県神戸市・杉岡壱風

▽白濱一羊選　特選

風受けて音叉となりぬ冬木立

花巻市・大平春子

ジュニア部門

大会賞

▽白濱一羊選

素振りして雪の白さに土一点

盛岡市・田澤孝丸

【評】作者は野球部員か。雪の積もったグラウンドで素振りをしている。その足元だけ、グラウンドの土の色が見えているという光景。

文京区長賞

▽工藤玲音選

運動会午後の始めに太鼓響く

盛岡市・及川さつき

【評】運動会は秋の季語。実りの季節、勝敗を決める後半の始まりの合図はどぉん！と大きな太鼓の音。気合が入る力強くてすがすがしい一句。

英語部門

大会賞

▽マイケル・ディラン・ウェルチ選

railway station	鉄道の駅が
quietly becoming a part	静かに彼女の沈黙の
of her silence	一部になる

トルコ・Engin Gülez

【評】季節は分からないが、冬、つまり孤独な季節と想像できる。人のいない駅と同じくらい寂しい、孤独を感じることについての句。

◇特選（5作品）

▽木内徹選

a murmuration	ムクドリが南に急ぐ
of starlings hurries south	つぶやき
I cut the last rose	私は最後のバラを切った

ドイツ・Benjamin Blaesi

▽木内徹選

cupped hands . . .	カップ状にした手—
I drink the music	私は月光の
of moonlight	音楽を飲む

カナダ・Veronika Zora Novak

▽木内徹選

hospital garden	病院の庭
he quickly lowers his mask	彼はすぐにマスクを下げ
and smells the roses	バラの香りを嗅ぐ

アメリカ・Patricia M Campbell

▽マイケル・ディラン・ウェルチ選

baking day	ベーキングデー
grandma kneads and shapes	おばあちゃんはこねて形を
another story	整えます
	別の話

カナダ・Beth A. Skala

▽マイケル・ディラン・ウェルチ選

Covid winter . . .	コロナの冬—
her one-breath poem	彼女の一息の詩を
in two breaths	二呼吸で

アメリカ・Ed Bremson

「多くの国や地域に浸透」 元日大教授 俳人木内さん

世界唯一のバイリンガル俳句雑誌「俳句フォーラム」代表を務め、元日本大教授で英文学が専門の俳人木内徹さんに、これからの英語俳句の可能性を聞いた。

俳句は既に日本に限ったものではない。英語で詠む英語俳句をはじめ、多くの国や地域に広がりを見せている。

英語俳句と日本語俳句の一番の違いは、季語の必要性が高くないこと。例えば季語として使われる花が育たない地域があるように、各国の気候風土に合った季節感ある句を作れば良い。

また本来の文章に必要とされる動詞や関係代名詞がなくとも俳句が成り立つ。3行で完結し、誰でも簡単に詠めることが最大の魅力と言えるだろう。

ジャズ俳句やブルース俳句など、アレンジが加わり俳句の世界がどんどん広がっても、基本的には短長短のリズムが守られており、日本文化を離れることがないのも大きな特徴だ。

最近では、インターネットの普及にコロナ禍が相まって、俳句そのものの在り方が変化している。個人であっても世界中の作品に触れたり学んだりできるようになったことが、ますます自由で新しい俳句の世界を広げるきっかけになるだろう。（談）

一句詠んで自分に磨き

選者夏井さんインタビュー 記録写真のように

夏井いつきさん

「盛岡を詠む」という題材に対して、今回この土地らしい新たな素材が出てきたことに非常に驚いた。きちんと部門として確立した方が良いと思う。地元の先生たちが、方言や岩手ならではの言葉を解説してくださることは、盛岡のことをよく知らない人にとって、とても新鮮だ。記録としても重要な活動だと思うので、ぜひ「盛岡を詠む」部門を常設してもらいたい。

俳句は一人で詠んで一人で納得するものではなく、人の意見をどんどん聞いて、自分をどんどん磨いていくもの。人に何か言われたからといってめげていたらもったいない。たくさんの意見を聞くことができるのが、私たち俳人という打たれ強い人々なのだから。

コロナ禍のせいだけでなく、病気やけが、介護のため思うように外に出られない人はたくさんいる。けれど家の中にだって、たくさんの俳句の種があるということを知ってほしい。コロナ禍だからこそ、見え出すものだってある。記録写真のように、自分は何に心が癒やされ、何にいら立ったのかを、17音で記録してほしい。

ラジオやテレビ、ユーチューブを聞くだけ、見るだけではなくて、一句を投じるところから、新しい面白さを手にしてほしい。（談）

一般・ジュニア部門入賞者ひとこと

▽富山の露主さん（富山県高岡市）

知人と俳句づくりをする中で発想が生まれ完成した作品なので、とても驚いた。座敷童子という空想的な存在に憧れがあり、俳句の中に使ってみたいという思いがあったので、すごくうれしい。

▽下河原正泉さん（盛岡市）

暑い日が多かった今年の夏、盛岡の街を歩いている時に「賢治の井戸」を見て浮かんだ情景を句にした。この句をきっかけに名水に親しんでくれる人が増えるとうれしい。季語を使い自然を歌いながら思いを表現できるところが魅力。

▽柳幸子さん（久慈市）

母に誘われ俳句に挑戦し、初めて応募した。ふるさとの言葉である「方言」を使うことで自分の心を表現した作品に仕上げた。季語がない句なので、まさか受賞できるとは思っていなかったが、こだわりが評価されて良かった。

▽二藍さん（盛岡市）

さんさ踊りが中止となった今年の夏だが、若い人たちのエネルギーや熱気の渦を詠んだ。「幸呼来（さちこらい）」という言葉がピンときた。「遠雷」でコロナ禍の現状を表しつつ、明るい未来へ向かってほしいという思いを込めた。

▽田澤孝丸さん（盛岡市）

自分に身近なことを題材にしようと思い、野球部員としての日常を俳句にした。まさか選ばれると思っていなかったのでうれしい。今年はコロナウイルス感染症の影響で練習試合などもなくて、学校のグラウンドや自宅で練習した風景を詠んだ。

▽及川さつきさん（盛岡市）

小学生の時、運動会の午後の部は太鼓の演舞で始まった。校内のオーディションで、その演奏者に選ばれ、うれしかった思い出を込めた。今回初めて俳句を作り、17文字の中にその情景を収めるのに苦労したので、とてもうれしい。

表彰式に出席した（左から）及川さつきさん、田澤孝丸さん、選者の白濱一羊さん、谷藤裕明盛岡市長、下河原正泉さん、二藍さん

自然・歴史・風土 国内外に発信

大会実行委会長・谷藤市長

盛岡国際俳句大会は、豊かな自然環境と市民生活に根付いた歴史・風土などの魅力を再発見し国内外に発信するため、昨年、市制施行130周年を機に開催しました。

今大会は、新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない中でも、日本語・英語合わせ三千句を超える多くの投句をいただきました。投句してくださった方々の盛岡への思い、俳句への情熱をしっかりと受け止め、この盛岡に誇りと愛情を持ち、盛岡の多くの魅力を国内外に発信していけるような取り組みを今後も進めていきたいと思います。